

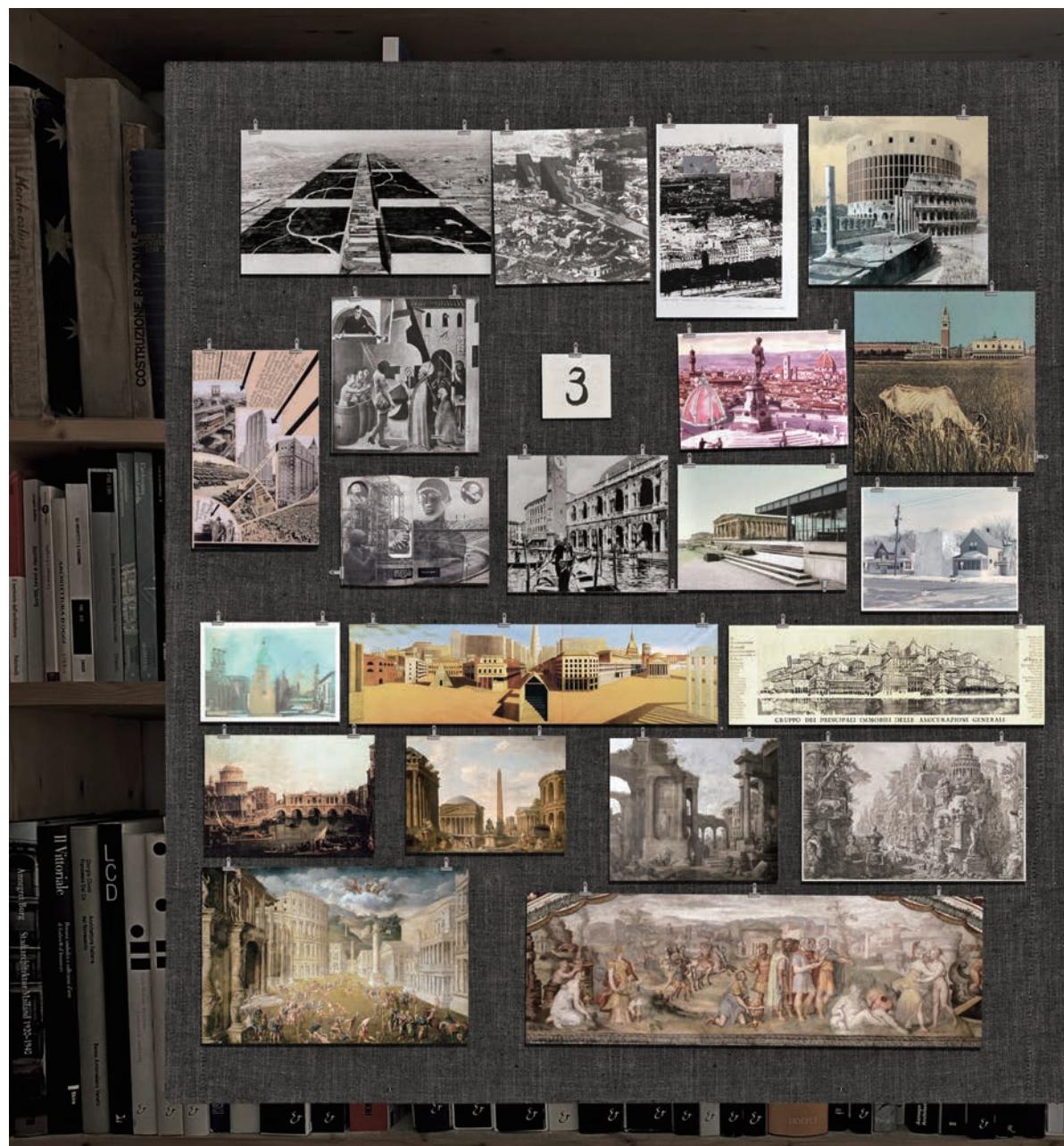
イタリアのフォトモンタージュ ニコラ・ブラギエーリ

参照 | 本誌 pp.13-27

本稿に続くページで紹介するのは、新しい世代のイタリア人建築家たちが制作した「コラージュ・アルバム」である。アルバムを構成する作品は、基本要件に則して選ばれている。すなわち、特定の建築プロジェクトの表現に帰さないが、特定の建築概念を巡る「図像による議論」という意味でそれ自体が建築プロジェクトとなるグラフィック作

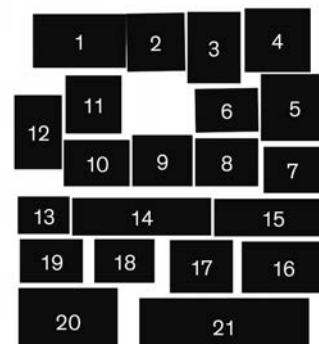
品であることを基準にしている。これらの図像はモンタージュと写真レタッチの伝統的な技法で制作された。なかには真にアナログ手続きと呼ぶべき、広告、絵葉書、絵画、版画といった物理的支持体の上に写真の断片とペン画を重ねる、より古い技法を使ったものもある。また、先進的なコンピューター・グラフィックスの作品は、本号の『CASABELLA』への掲載により、初めて仮想世界の外に出る栄誉に浴したものとなる。編集部の選択として、制作技術が何であれそれを明示しない方針が採られた。

アルバムの序章には、アビ・ヴァールブルクの手法に倣い、図像学的併置により議論の糸を結びつけていくパネル型アトラスが複製されている。これは「イタリア的コラージュの系譜」で、大規模な通時的見取り図を構成する多くのピースが、類似性に基づき整理しようという恣意的な試みをことごとく跳ね返して、無秩序で気まぐれに並んでいる。このアルバムには見取り図を完成させようという野心はなく、ただ並べ続けるよう提起する。その点に関して、基礎的な古代の参照源をすべて飛び越えて、人文主義



【イタリア的コラージュの系譜】

- 1:アーキズーム「ノー・ストップ・シティ」、1970-72
- 2:Zsigurat「サンタ・クローチェのための直線都市」、1969
- 3:アンドレア・ブランジ「都市フォトモンタージュ」、1987
- 4:スーパースタジオ「連続的記念碑、グランド・ホテル・コロッセウム」、1969
- 5:グレッポ9999「高潮からのヴェネツィア旧市街の救出」、1971
- 6:UFO「(非)膨張性大型堂クーポラ」、1968
- 7:ジャンニ・ベッテナ「氷の家II」、1971
- 8:フランチスコ・ヴェネツィア「神殿の平野(建築とは何か?)」、2013
- 9:イポリット・バイヤー「もしヴィチェンツァに海があつたら?」、1839
- 10:ブルーノ・ムナーリ「反文学年鑑」、1937
- 11:ヴィニチオ・バッラディーニ
「トラウマ的遊園地I」「Cinematografo」、1927
- 12:フォルトゥナート・デベロー「フェリーでハドソン川を渡る」、1930
- 13:アルド・ロッシ「アナログのヴェネツィア」、1989
- 14:アルドウイー・カンタフォラ「アナログ都市」、1973
- 15:ポッリオーネ・シゴン「ゼネラリ社の都市」、1931
- 16:ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ
「アッピア街道とアルデアティナ街道」「ローマの遺跡」、原絵、1756
- 17:ピエトロ・パルトロニエーリ
「遠くに都市の見える古代遺跡のカプリッジョ」、1740
- 18:ジョヴァンニ・バオロ・バニーニ
「ローマのカプリッジョ、パンテオンその他のモニュメント」、1735
- 19:ジョヴァンニ・アントニオ・カナル / 通称=カナレット
「想像上のリアルト橋とその他の建物のあるカナル・グランデ」、1740-60
- 20:パリス・ボルドン「剣闘士たちの闘い」、1560
- 21:フランチスコ・サルヴィアーティ
「グリマー二家の起源と功績」、1537-40



グループワーク+アミン・タハ

「クラーケンウェル・クローズ15番地」

設計=グループワーク+アミン・タハ

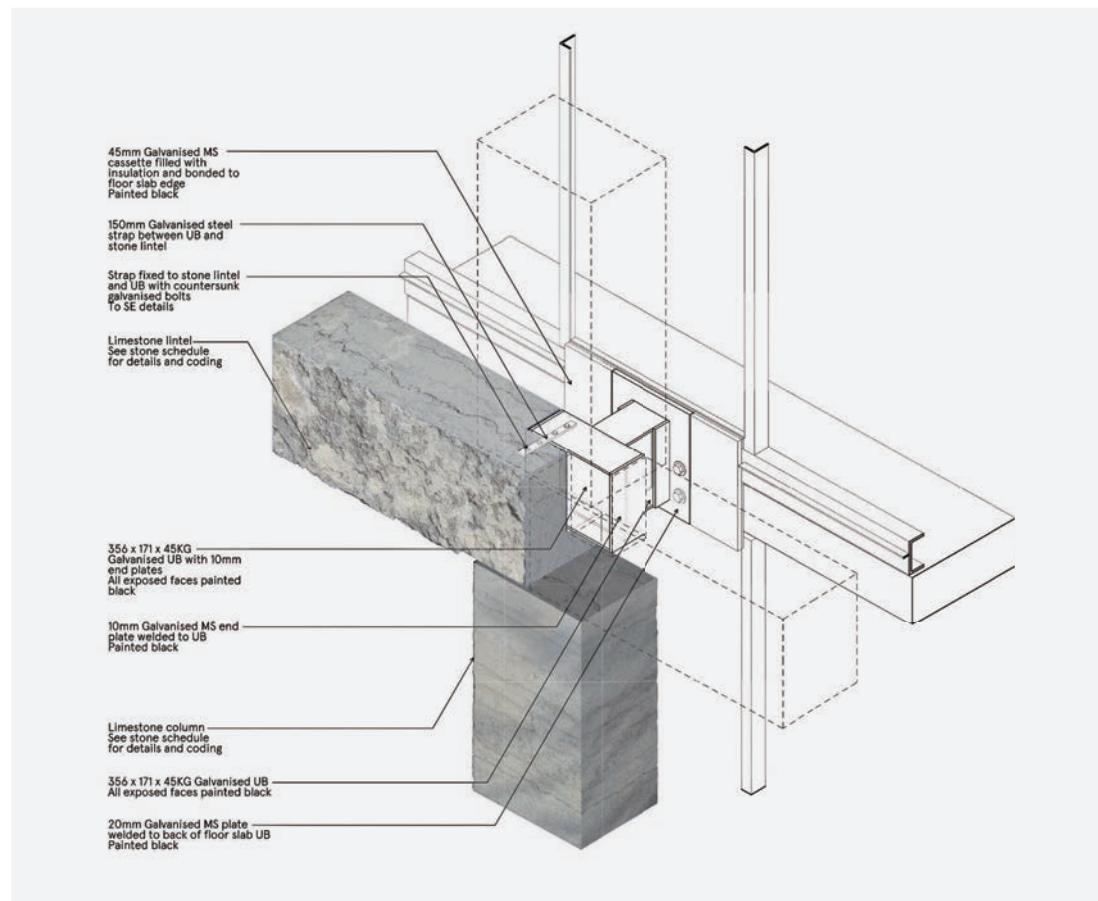
建築における皮膚粗鬆症にいかに抗うか

ウィリアム・マン

参照 | 本誌pp.52-65

「クラーケンウェル・クローズ15番地」の立地環境は、ロンドンの特徴的なものである。住宅および街区が教会の尖塔を中心にかたまり、先細りのオープンスペースがある、ありふれた町である。植物が青々と茂る教会の庭のまわりに、住宅、工場、福祉施設、寄せ集めのようなジョージ王朝期の建物が混在して建っている。新築の建物は、教会の敷地と裏手を曲がりくねる街路の、外側の角地に置かれている。強烈な立体的存在感を放ち、直線的で、立方体より少し高さのあるかたちで、片側は建物と隣り合い、反対側は庭の広がりに従って空いている。建物はフレーム構造で、6層の高さ、5ペイの幅をもち、落ち着きと一定の壮大さが感じられる。柱と横桟は彫りが深くざらざらした灰色のモノリスと、滑らかな白い石でできており、単純なボリュームに激しく生々しい物理的実態を与えていている。石造スケルトンの裏側は、透明なガラス被膜となっている。建物の上にはすんぐりした松が何本か見え、不規則な針のような王冠を形づくっている。

建物の構成は非常に図式的であるにもかかわらず、石の不規則性が建物に不安定な性質を与えている。開口部の縁の一部は直線で、一部は凹凸がある。一部の横桟から、まるで引っ張ったように、ざらざらした縁が垂れ下がっている。支柱は、中央のペイではすんぐりするほど幅広いが、隅部は驚くほど華奢である。柱が細くなるにつれ



ファサードのシステム図

て、開口は中央のほぼ四角形から端の長方形まで変化する。名目上の寸法を反復する一方で、柱と開口はそれぞれ不定形で、独特的なシルエットと比例を持っている。その結果、建物は安易な外的的理解をはねのける。柱は上に行くほど厚みを減らし、ざらざらした表面が滑らかな壁面の前面に不安定に突き出るさまは、まるで工事が中断され、未加工の石材が石工の鑿を待っているようだ。

建物の力強い物理的特徴は、モノリスの粗い表面と、この巨石が演じる役割——つまり抜き取る作用[開口]と支持する作用[柱]——の両方から生まれている。石の支柱は床板を支え、中央のコンクリート・コアに荷重を分散させる。柱の多様な幅に、床スラブからさまざまな荷重がかかることが表現されており、中央部は荷重を受けているが、隅部の支持体にはほとんど負荷がかかっていない。支柱と支柱を縦につなげる各ジョイントに付けられた、奥行きのあるステールの持ち送りは、横桟に隠され、位置を決められ、固定されている。またナイロン製の絶縁プレートでスラブの端にボルト留めされている。石の仕上げの違いは、「マスター・ブロック」の採掘と分割に由来し、また単に回転することで生まれた。石を割る作業とドリルで削る作業の組合せにより、ブロックは採掘場から切り出され、さらにダイヤモンド・チップソーで支柱や横桟に切断された。それぞれのブロックの2面はギザギザで、2面はすっぱりと割れている。マスター・ブロックのざらざらした表層は無駄に削り取られることが多いが、ここでは、石材の加工



配置図



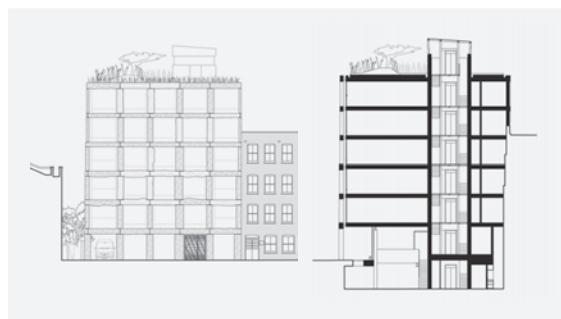
街路より見る



建物下部のディテール



各階平面図



立面図／断面図



地階のオフィス・スペース



アパート内部



アパート内部：ペリメーター・ゾーン

工程が堂々と誇示され、この石灰岩に含有された甲殻類の外皮とアンモナイトの渦巻も露わになっている。オーナメントの代わりに、時間の作用が現れているのである。

水平部材と垂直部材からなる図式的な外骨格は、コアとスラブを鉄筋コンクリート造とすることで可能になった。捻じりと破碎の力は、剛性の高い階段とエレベーター・コアによって解決されている。漸進的な崩壊を防ぐため、スラブの縁にスチールの補強材がつけられた。その結果、建物は単に説明的だけでなく、非常に演劇的な存在となった。規則的なスケルトンは、大小の不規則さ、道路網と呼応した曲がりくねる動き、粗っぽく波打つ石と緊張関係を結びながら座している。

内部を秩序付けているのはコンクリートの階段室タワーである。1階はなく、堀のようなヴォイドに合板の橋が架かって、アパートメントと地下に連絡する。基底部に据えられたオフィスにはコラージュ作品のようなクオリティがあるだけでなく、地上的な落ち着きもある。広々としたアパートメントは、床から天井まで届くオーク材合板の棚で

間仕切りされている。この棚はファサードの換気パネルにも使われた。外装の鉱物質の性格は床、天井、家具調度によって維持されている。ただし粗石との距離は遠く、斜めから、もしくは縁にわずかに覗く程度である。代わりに、注意深く垂直に並べられた合板が、屋内を秩序付け、彩り、織のようにくるんでいる。とは言え、石の影響は残る。粗石でできた奥行きのあるフレームにより、太陽光を遮り、大きなガラスを嵌められるからである。石でできた崖の上は草木が茂る屋上庭園とされ、築山に背の低い松が3本立ち、雨水を吸収し溜める役割を果たす。すべての要素が、経験に裏打ちされた明快さと確信をもって配置され、分けるべきものを分かちながら、多岐にわたる問題をそれぞれに即した選択で解決している。

この統合された、簡素なデザインは、1人の手が作ったものでも突然降ってわいたひらめきの産物でもない。むしろ段階を踏みながら、集団的に決定された。デザインは、スチールの板と耐荷重性煉瓦で構成された初期バージョンから発展した。第3案の、耐荷重性のある白い石

を使ったデザインは、教会の塔とその足元に残る女子修道院の石壁への応答である。建築家、エンジニア、石工たちは、別のプロジェクトの石造の螺旋階段の設計で協働しており、この時の対話から耐荷重石造建築に向かった[参照:本誌,Figs.30-33]。つまり、建築家、エンジニア、石工の三者がすべてこの構造に深く関与しているのである。彼らは化石が含まれる白い石灰岩を探して、イギリス南部の沿岸にあるポートランド島から、リヨン南方のショメラックまで赴き、15,000年前の深度にある薄層を調査した。この石はコンクリートの3倍の圧縮強度があり、設置時に7%の炭素を含んでいた。石工頭はこれら3トンのモノリスを据え付けるための特別な訓練を受け、その間にエンジニアたちがコンクリートと石を分けるための建設工程を決定した。慣習から外れた設計プロセスであるものの、複雑で重層的な工事ができないため、単純化された。そこには、建築家がディベロッパーの役割を果たしたことでも大きく影響している。この石による外骨格を達成するには、機転の利く知性と、同じくらいの勇気が必要だっ

マルコ・オルタッリ

た。なぜなら、石のブロックを採掘し、その表面の質をマッピングし、現場に到着するまでわずか数週間で切断計画を策定する——破いた紙切れを使って、ファサードが立ち上がった状態をデザインする——には、多大な気力、勇気、忍耐力を要するからである。

現在という極薄の被膜と短期記憶の時代において、稀なほど実体のある建物は、ゴシックとマニエリスムの伝統から力強さと統一性を引き出している。本作を実現するノウハウは、鎖のように何世代も続くフランスの石工の伝統と、静力学のデジタル分析に由来する。粗石積みのパラツォ、不安定かつ未完成のような、物質のカオスから出現したような外観——こうしたテーマを、16世紀の建築家と芸術家は楽しそうに、混乱させるように追求した。「クラーケンウェル・クローズ15番地」は、建築の古の部族どうしの結婚以上のものを象徴している。制作と思考のこうした伝統は、人間が創り出した自然の実用的探求を支えてきた。建物と都市は、自然资源の効率的運用、含有炭素の削減、埋立地の生態学に支えられて成立している。本作における建築家、エンジニア、石工の協働は、古いものの間から豊かな新しい地層を開拓したのである。

作品:クラーケンウェル・クローズ15番地

設計:グループワーク+アミン・タハ・アーキテクツ

建築家:Dominic Kacinskas, Alex Cotterill, Amin Taha

建築主:15 CC Limited, Amin Taha

第1期施工:JB Structures | 第2期施工:Ecore Construction

コンサルタント:Webb Yates(構造); MLM Group(設備);

Cumming Europe(工費管理); RBA Acoustics(音響);

MLM Building Control(監査);

Todd Longstaffe-Gowan (ランドスケープ)

施工:The Stone Masonry Company(石工);

Ecore Construction(造作); Glasstec Systems(ステンドグラス);

Eastnor Ltd(鉄工); Reliance Veneer(木工);

Trademaker Ltd(ランドスケープ)

用途:オフィス、住宅 | 規模:延床面積 2,000 m²

スケジュール:引き渡し 2017年11月23日

所在地:15 Clerkenwell Close, London, U.K.

ちょっとした別荘

参照 | 本誌 p.67

(……)別荘、そして別荘。部屋が8つにバスルームがふたつもある大別荘。部屋が40もある王侯貴族の別荘には湖水をのぞむ広大なバルコニーがあり、菜園、果樹園、ガレージ、門番詰所、テニス、飲料水、7万リットルをこえる汚水溜めの堀り池など、セッルチョン[レゼゴーネ山]のパノラマ風の展望をほしいままにする。あるいは南に、あるいは西に、あるいは東に、あるいは東南に、あるいは南西に面し、北風とパンペロ[大草原を吹く寒風]を防ぐには榆の木とブナの古びた影があるのに、それでいて、セッルチョンの堆石の円形劇場やプラードの並木道にまで及ぶほど吹きまくる抵当権のモンスターは防ぎようがない。別荘、ちょっとした別荘、人であふれた大別荘、ぽつんと離れた小別荘、二家族が使っている別荘、別荘気取りの家、田舎家ふうの別荘、別荘になっている田舎家、パストルファツィオの建築家たちがしだいしだいに、前アンデスの斜面にあるほとんどの、優雅そのものの、穏やかなこれら丘を宝石がわりの別荘で飾り立てたのであった。その斜面がそれぞれの湖の落ち着いた水盤へと、「甘い調子で下っている」(マンゾーニ『いいなづけ』)のは今さら

いうまでもない。ある裕福なオートバイ用サドル製造業者の委託による別荘もあれば、破産した繭づくりのものもあり、また、色を塗り直した伯爵とか色あせた侯爵といった連中のものもあり、この伯爵は指をほっそりと美しくしておくことができないし、侯爵は裕福になることもできず、さりとてあいにくことに破産もできないまま、ただただ、途方に暮れた繭、空飛ぶオートバイの土地で、おのれの精神の孤高を思いうかべるほかなかった。まるでカナリア諸島のバナナ園から出てくるように、いなご豆から、あるいはパンザヴォイスのおびただしい葉っぱから、かつて例のないほどたくさんのが「鳴きふくろう」やら「^{あだ}嫋嫋な女」が出て来たときなど、これらの別荘の大部分について、だれもがいざ必要となれば、機敏な作家になりかわり、「丘が緑なすそのあたりに流し目をくれていた」と言いかきることもできたであろう。しかしそういう緑のキャベツのたぐいはわれわれの得手ではないので、屋根全体がそのまま軒になり、軒全体がそのままとんがり、北国ふうの、つららのような奇形の三角形をなし、また、アメリカふうの聖母昇天祭の茫漠としたなかで、料理をつづけているくせ、スイスの山莊をもって自認するこれらの工芸作品ともいるべき別荘のなかからいちばん目に入りやすいものを指摘するのにとどめよう。もっとも、そのオーベルランドの材木はただ色



エントランス側ファサード

ターニングポイント

ターニングポイント：丹下健三「成城の家」、1952-53

丹下健三(1913-2005)は、20世紀後半の最も多作な建築家の一人であった。彼は、日本にとどまらない、建築の現代的展開を方向づける最前線の役割を果たした。彼の仕事は世界中で称賛され、彼のさまざまな研究は多くの研究者の注目を集めてきた。1985年にレイナー・パンハムは、1960年に丹下が発表した東京湾岸の「都市化」計画が建築文化の帰還不能点を体现したと述べた後、1963年の大地震後に構想されたスコピエ再建計画によって、「日本のヴィジョンは今や世界のヴィジョンになった」と主張している。近年、丹下の存在は忘却の影に覆われつつある。その理由からも、われわれはJ·K·マウロ・ピエルコンティに寄稿を依頼し、以下に掲載する。この論文で取り上げる作品は、丹下のキャリアにおける重要な転換点を示し、そこに込められた意味から丹下の人となりと文化のあまり知られていない側面が明らかになるだろう。

創造のジレンマ：丹下健三の成城の家

J·K·マウロ・ピエルコンティ

参照 | 本誌 pp.74-89

広島ピースセンター(1949-55、現・広島平和記念資料館)や旧東京都庁舎(1952-57)のような、丹下健三(1913-2005)が1940年代末から50年代にかけて実現した初期作品群には覚醒が伴っていた[Fig.2]。の中でも尋常でない「飛躍」を遂げたのが、首都の南西に位置する有名



Fig.2: 丹下健三 | 広島ピースセンター(現・広島平和記念資料館)、1949-55

な郊外住宅地である成城に、丹下が建てた自邸(1952-53)である。

この時期に新しい段階を正確に認識していたのは丹下本人である。彼はまさに出版マラソンと呼ぶべきものの主人公を自任し、一連の論文と書籍を世に送り出した。特に重要なのが、桂離宮についての書籍(1960 | 序文: ヴァルター・グロピウス、写真: 石元泰博)と、伊勢神宮についての書籍(1962 | 歴史的論考: 川添登、写真: 渡辺義雄)である。『桂』は1960年に、『伊勢』は1965年に英語版も出版された[注1]。ただし出版年に騙されてはいけない。これらの本は何年も前から企画され、丹下の初期実作と同時に並行的に準備されたからだ。建物を地表から持ち上げる点をはじめ、彼が自身のために建てた住宅のフォルムにも桂離宮と伊勢神宮が参照されている。そこで、まず丹下の自邸の描写から始め、この建物が存在しなくなつて何年も経つことを思い出しておきたい。それとともに、丹下の自邸があった場所が、その後の再開発によつてもはや認識不可能になったことも思い出しておこう。

すでに述べたように、この住宅は成城という、都心から少し離れた優雅な郊外住宅地にあった。今日でも、一般的な郊外地区とは異なる雰囲気が保たれている。なぜなら、他地区とは違い、人々が私鉄駅の周りにできた小規模な商店街に寄り添うように並んでいるからだ。「中心街」も、近代的な高層建築も、侵略的な高層住宅・商業ビルもなく、低層の店舗が並び、それらと連続するように、一世帯住宅がさらに低密度で建ち、広く、一部は並木が植えられた道路が住宅街を通っている。イギリスもしくはアメリカのガーデン・サバーブ[低密度で自然環境に恵まれた郊外住宅地]の並木道のようだ。当時は今以上にその雰囲気があった。こうした街路を散歩しながら、時折立ち止まって家を眺めるのは、さらに楽しい。と言うのも、やはり成城の特質なのだが、古くからの慣わしで、住宅は周壁で閉られずに外からの視線に開かれているからだ。歩道または道路とのまさに境目から、何の障害物も柵も置かずそのまま庭に続くのである。丹下が自邸を建てるために選んだ敷地もそうだった。周壁のない庭に、小さな築山が、視線を遮る簡素な「防備」として配された[注2]。その周りをアクセス路が巡っており、他のすべての家の庭でそうだったように、近隣の子供たちが芝生に入って遊んでも咎められることはなかった[Figs.3, 4]。

この点に関して——なお、ここから建築に関わる最初



Fig.3: 丹下健三 | 成城の家、1952-53 | 庭の眺め

の「高次の」引用を辿り始めよう——『芸術新潮』が企画した座談会の席で、同誌の1954年5月号で発表した自邸の設計を説明するために、丹下は吉阪隆正(1917-80)に促されて、いかなる機能からも自由な1階は公共空間として捉えるべきと明言した。さらに、住居部分、つまり私的な空間はピロティで持ち上げられた——吉阪が的確に指摘したように——上の階に限定されると述べた[注3]。

「地表を開放する」、つまり地面を公共のための部分と見なすアイデアは、それまでにない社会参加の表現として『芸術新潮』に掲載された議論で中心のテーマになった。その根底には、誰も名を挙げていないが、ル・コルビュジエの仕事があった[注4]。座談会は驚くことに「人工土地」の概念を巡って展開された。吉阪がまさに同年の1月に、『国際建築』誌上で「個と集団の利益の境界としての住居」という意味深い題名で発表し、発展させたテーマである[注5]。ル・コルビュジエの住宅における、20年代初頭のシトロアン型住宅以降の——その到達点は称賛されたサヴォア邸となるが、その屋上庭園は家を支える軸として機能することで、居住空間の重心を地面から高く上げている——高架のデザインにヒントを得た吉阪は、地表から持ち上げて住居の私的用途に充てられる建物を「人工土地」と呼び、その下の地表は公共のものとすべきと主張した。

先に触れた座談会でも、才氣溢れるやり取りの中で丹下も他の人々も、それぞれニュアンスは違うが、この時まで日本で前代未聞だった展開を予示しようとした。彼らは土地の国家所有や、所有権ではなく土地の使用にのみ基づいた税制への総合的改革を語り、建物のうち地表から持ち上げられた階のみ住宅とすべきと考えた。おそらく、その覚悟があったのは座談会の参加者のうち吉阪

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2020 Arnoldo Mondadori Editore

©2020 Architects Studio Japan